

展覧会ファシリテータ

「フロシキー」とは

About the Furoshikii: Facilitating the Exhibition

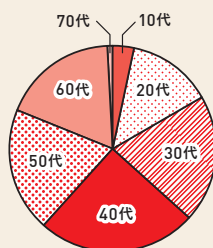
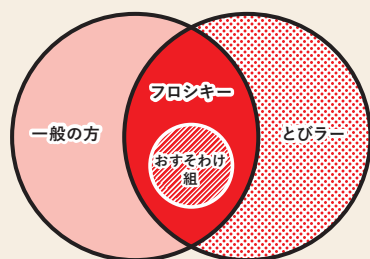
一般公募された総勢135名の展覧会ファシリテータ「フロシキー」。ここでは「おすわけ組（p77参照）」の活動も含めて、その背景や役割、具体的な活動内容を紹介します。

（募集期間：5月1日～15日、6月20日～30日 研修日：6月2日、16日、7月14日、15日）

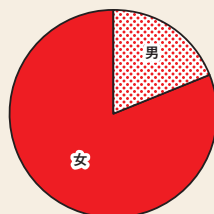
この展覧会では作品と人々をつなぐ「フロシキー」と呼ばれるファシリテータが活動していた。ファシリテータというのは人々の活動を助け、物事がうまく運ぶようにする人のこと、つまり来場者が展覧会をそれぞれに楽しめるような状況をつくる人たちだ。「フロシキー」はお弁当の「風呂敷」から転じたネーミングで、作品と人々を包み結びつける役割が名前に込められている。

展覧会場には通常、監視の人はいるが、ファシリテータがいるというのはあまりない。これは当館がここ数年少しずつ形を変えながら続けている新しい実験的な試みだ。展覧会の72日間、総勢135名からなる「フロシキー」が会場で作品とのよりよい出会いの場をつくっていた。まるでガーデニングのように、会場で日々よく人々の動きを見て歩き、コミュニケーションの芽があれば手入れをし、丁寧に水やりをしたりする、そんな活動だ。作品への出会い方は百人百様で正解はなく、コミュニケーションの取り方は来場者それぞれに違うため、来場者と作品との出会いをよりよくする方法は、単なる案内役よりもずっと創造性が求められる。

東京都美術館では2012年から東京藝術大学との連携事業「とびらプロジェクト」として、「アートを紹介してコミュニケーションを紡ぐ」約150名のアート・コミュニケーター（愛称：とびラー）たちが活動している。アート・コミュニケーターとは、多様な人々が暮らす世の中で、その個々の多様性を大切にしながら、アートを紹介してコミュニケーションの場を作る人だ。3年間の任期満了後は、それぞれの生活の地域に戻り、引き続きアート・コミュニケーターとして活動をしていく。



年代



男女比

フロシキーのチームに加わった135名の内、半数はこのとびラーからの応募で、もう半数が3年任期满了後の元とびラー、そして全く初めてこの活動をする新規の一般の方々と構成された。展覧会開幕まであと1ヶ月という時期にフロシキーチームが生まれ、展覧会がスタートを切った。試行錯誤の日々は悩みあり、笑いあり、ビックリあり。毎日の活動の終わりにふりかえった会場の記録が「ホワイトボード」(p109)の形で残っている。それは来場した約6万6千人の体験が積み重なっていく空間の、72日間の記録である。フロシキーが会場で来場者の状況に気づき、状況を整え、サポートし、1日の最後に必ずチームでふりかえり、それを会場実見記録として残す。それは美術館の担当者だけでは見えない、よりリアルな展覧会の実見記録となっている。展覧会の空間は、実り多い鑑賞体験が連続的に起こることで本当の意味での意図した空間になる。フロシキーは来場者にとっての伴走者であり、私たち学芸チームやアーティストたちにとっても欠かせない伴走者であった。

稲庭 彩和子(東京都美術館 学芸員)

フロシキーの活動

開室前から開室中、そして閉室後まで、「フロシキー」が来場者の鑑賞をサポートするために、展示室の内外で日々行っていた活動を、1日の時間軸に沿って紹介します。

開室前

朝のミーティング

その日予定されている会場及び館内のプログラムの確認
を行い、担当ポジションを決めます。

開室中

それぞれのポジションに分かれて来場者を迎えます。



GALLERY B

お弁当箱のハンズオン展示 (p34-)
お弁当箱に触りながら鑑賞する来場者のサポートを、コミュニケーションを通じて行います。



GALLERY A

《intangible bento》(p58-)
お弁当の精霊が語る様々なストーリーを聞くという作品の世界観を共有し、「精霊フォン」を貸し出すウェルカムステーションを案内します。



GALLERY C

《お父ちゃん弁当》(p88-)
お弁当ルーレットの仕組みを来場者に伝え、その活動をサポートします。

〈おすそわけ組〉



《FRAGMENTS PASSAGE
- おすそわけ横丁》(p70-)

バザール

来場者を迎え、おすそわけを介して
コミュニケーションを取ります。

スクエア

おすそわけボックスの貸出・返却を行います。

ライブラリー

来場者が持ってきたおすそわけボックスの展示を行います。

閉室後

ふりかえり

[ホワイトボード]

[ふりかえりノート]

その日にあったことや来場者とのエピソード、気になったことなどをふりかえります。

掲示板

ふりかえりが終わったらウェブサイトのフロシキー専用掲示板に投稿。ふりかえりの場になかったフロシキーからのコメントや後から気がついたことも入力でき、全員がその内容を共有していました。現場である展示室とインターネットの両方で、フロシキーが交流しました。

掲示板で共有されたある日のホワイトボード

展示会が始まってからの日数

日付

当日の入場者数

出入りしたおすわけボックスの数

館内プログラムスケジュール

ポジションおよびシフト

ギャラリーごとのふりかえり

翌日以降への引き継ぎ事項



フロンスキールームでのふりかえりの様子

ホワイトボードにはふりかえりのコメントに加えて、その日のシフトや会場外の館内プログラムや団体来館の予定、入場者数やおすわけボックスの貸出・返却数、翌日への引継ぎ事項などを記入し、掲示板でも共有されました。

フロンスキー(五十音順)

青木裕子、秋本圭美、阿部忍、池田憲夫、石井萌愛、石澤夕貴子、市川佳世子、市川典子、伊藤和代、井上夏実、今井和江、海上尚美、大澤桃乃、大谷美耶子、岡庭正行、小田節子、小田嶋景子、尾鷲瑞穂、戈文来、梶浦さくら、河合理美、川口幹雄、北田郭時、木村仁美、窪田光江、桑澤悦久、突生川心、小寺祐貴、小林美香、古林美香、小山朋香、齊藤三三、齊藤涼子、佐竹知子、篠田綾子、島村紗緒里、清水悦子、白石敦子、白石慶子、白土寧志、杉山由希子、鈴木敦子、鈴木重保、鈴木典子、鈴木文子、鈴木康裕、鈴木陽子、関恵子、高田明子、竹内明佳、武田正昭、田中優羽、土屋典恵、手塚紀恵子、中澤さより、中田涼子、中野未知子、西見涼香、西牟田道子、橋本典子、服部美香、原順子、原悠、原口聡子、藤田まり、牧幸子、松本みよ子、三浦茂樹、宮原那奈、武者佑生子、村上節子、元島千恵子、守屋智子、八木晋、山田茜、山中美ほ、山村ゆかり、山本啓子、吉川美樹、吉村陽子、雷雷 (おすわけ組を兼ねていたメンバーはp77参照)



ギンガムチェックの
バッグが目印!

ファシリテータ運営を担当
した一般社団法人アプ
リエイトアプローチの近藤
乃梨子さんは元とびラー

フロシキーの活動をふりかえって

展覧会閉幕後、フロシキーのみなさんに活動を終えての感想を聞きました。一部を紹介します。

※五十音順

昔から“おべんとう”に対して興味を強く持っていたため、年度当初に“おべんとう展”のことを聞いたときからわくわくが止まりませんでした！おべんとうって“みえないものを、かたちにすること”の一種だと思います。阿部さん、大塩さんの作品では、仕事に対する思い、今日の一日に対する思い、家族に対する思い、それらが小さな箱の中に詰められる。鑑賞者はその写真を見て、おべんとうに込められたものに思いを馳せる。森内さんの作品は、まさにおべんとうって何?!というところから、中学生が手探りながらも形にしていくなプロセスが臨場感たっぷりに感じられる。とてもおもしろかったです!!

井上夏実

楽しかったです。午前のシフトが多かったので、朝上野公園を横切り、通用口から入っておにぎり階段を下りて展示会場へ入っていく…私の「furoshikii days」(ヒラクさん風に言ったつもり)でした。一番うれしかったのは、マライエさんのギャラリーAで小さなお子さんを連れた外国人女性が、ポストカードを渡すときに展示について「I love it !」とってくださったこと。他のフロシキーのみなさんも同じだと思いますが、楽しみながらじっくり鑑賞している方を見ているとうれしくなりました。

小田節子

おすそわけ横丁では、試行錯誤を重ね、来丁者(横丁への来場者!)への対応を変化させていきました。北澤潤さんが許したゆるやかな雰囲気の中で、アーティストと組員と一緒に横丁の空気を作っていました。見かけは同じでも、会期当初と終盤では中身の違う展示空間になっていたのではないのでしょうか。まさにお弁当の中身をおすそわけするときに起きるような、人と人のゆったりとした関係や、厚意と感謝の出会いを生む空間になった気がします。あとは来丁者の皆さんが、横丁での体験や気持ちの変化を、風呂敷には包めないおすそわけの品として持ち帰ってくれていればと祈るばかりです…。ソワケーオス!

小野寺伸二

私のお気に入り小山田さんワークで、ある8歳の女の子は、地学好きの小山田さんの娘ちゃんに負けないくらい魚オタクなのだと分かりました。「ゆめ」というテーマで描いた絵には、水族館で見た生きものたちが絶妙なバランスで配置されていて、お母さんが「え!あなたすごい?こんなセンスあったの?」と本気で感心していました。別の日には、なんとなく見覚えのある小さなマークを規則的に描いている男の子がいて、こっそり覗いてみたら、タイトルは「おばーちゃんの畑」。地図記号だったんだ!と後から来たお父さんとうなずきあって和みまくりました。家族でも知らない一面が出てくるなんて、おもしろい企画展だなあと感じました。

戈文来

初めの頃は、正直言って「ずっと立ちっぱなしだし、時間も長いし疲れる…」と続けられるか不安でした。しかし、友人と見に来たり、スペシャルマンデーで小学生と鑑賞するたびに発見がありました。またフロシキーとおすそわけ組員がいる意味を来館者の立場で感じ、「おべんとう展」すごい!と魅力にはまっていきました。来るたびに変化があって、展覧会が生まれ、成長し、変化していく場に立ち会えたこと、得難い経験でした。マライエさんのメモリーの部屋で、来館者がおべんとうの記憶をたどる中で、さまざまな想いが(ハッピーばかりでなく)蘇る場に立ち会い、時には共感できたことも心に残っています。

関恵子

お弁当という、誰にも親しみのある、そしてみんなに想いや思い出のある展覧会に関わることが出来て、本当にいい経験になりました。触れるお弁当箱では、タイから来た人にお弁当箱のことを聞いたり、2時間立っただけで5人以上の人に「これと同じ赤いアルマイトのお弁当箱を持っていました」と話しかけられ、ここにお弁当箱が置いてある意味とここにフロシキーが立っている意味を噛み締めました。精霊フォンの案内に怪訝そうにしていたおじ様が、「中学校の時のお弁当の思い出を短冊に書いてきました」と満面の笑顔で精霊フォンを返しに来られたのが忘れられません。たくさんの短冊に、お弁当の思い出は本当に凄いい!と思いました。

村上節子

おすそわけ横丁では、体験型の芸術だということを理解してくれた人が意外と多かったことに驚きました。一人で静かに考えるように見ていた人も、頭の中ではさまざま忙しく活発に考えているようです。話してみるとその方のいろいろな体験や考え方が芋づるのように出てきます。きっかけが大事なのかもしれません。展覧会という中で、モノはメッセージを乗せている乗り物だと言っている人がいました。「おすそわけ…意識して考えたことがなかったなあ」「シェアじゃないのよねえ、おすそわけって」。フロシキーが来た人と話しながら、おすそわけってなんだろうと一緒に考えていく展覧会なんだね…と。

園田俊二

最終日、触れるお弁当箱のコーナーのことです。曲げわっぱをこの後買いに行く人がいて、その方たちと「わっぱ談義」で盛り上がりしました。その後、目と耳に障がいのある方がいらっしゃいました。私がお弁当箱の拙い説明をすると、付き沿いの方は指点字でピアノの鍵盤を弾くように手から手に伝えてくださいました。どのお弁当箱も堪能してもらえたと私は感じました。最終日までの他のお客さんからもらった思い出や情報や知識があったからできたことです。お客さんからのお裾分けのようなものです。私もそれを2組の方にお裾分けできてよかったです。

吉川美樹